

## はじめに

令和4年度、埼玉県環境科学国際センター(CESS)は「日本一暮らしやすい埼玉」に環境面から貢献しつつ、開設22周年を迎えました。そして新たに酒井辰夫センター長、研究職として、高沢麻里技師、河野なつ美技師、落合祐介技師が着任しました。

また令和4年度から5年間の予定で、大原利眞研究所長を中心に「地域協働による環境課題解決への貢献」を念頭に、活動に取り組み始めました。これは「研究所中期取組方針」として、気候変動適応センターと、今年度の新設されました生物多様性センターという2つのセンター(C)、ならびに社会実装化コア、危機対応コア、それに加えて国際連携コアという3つのコア(c)の2C3c体制で進めています。

同時に、CESS内の部会・委員会等の改編、研究評価システムの合理化、職員の待遇改善などにも着手しました。

コロナ禍にもかかわらず、投稿中を含めれば50件近くの論文が活発に公表され、そのかわり多くの職員が、感染症対策や保健所、鳥インフルエンザ防疫作業の応援業務にも尽力いたしました。

このような状況で、高沢麻里博士が日本環境化学会から環境化学論文賞、米持真一博士が全国環境研協議会支部長表彰、安野翔(なつる)博士が三学会合同のELR2022つくばでの優秀口頭発表賞、そしてCESSも環境科学会から多年にわたる貢献に対して感謝状が送られるなど、CESSでの研究の蓄積と貢献が実り、高く評価されたことは関係者一同、誠に喜ばしいことでした。

CESSにおける国際連携においては、ベトナムとのSATREPS事業や、交流40周年を記念して行われた埼玉県-山西省小学生国際環境学習交流にも貢献しました。さらに国際共同プロジェクトへの参画や海外派遣交流制度の検討など、新しい国際連携や貢献のあり方を標榜しているところです。

環境学習は、「彩かんかん」をはじめ、生態園の整備も一段落し、出前講座の件数も回復しつつあります。情報発信においては、彩の国環境大学基礎課程やセンター講演会もハイブリッド方式とし、全国から広く視聴していただけるようになりました。YouTubeやFacebookなどのSNSをはじめとしたホームページのアクセス件数は年間20万件を超え、新しい時代の流れに対応すべく努めています。

「日本一暮らしやすい埼玉県」に環境の面から貢献していくためには、皆様の御理解と御支援を頂けなければならないことはいまでもありません。当センターの活動について様々な視点からの率直な御意見と、御指導、御鞭撻を賜ることができれば幸いです。

令和5年3月

埼玉県環境科学国際センター  
総長 植松 光夫